

## つながっていた

廣野 祐平<sup>1</sup>

編集委員長から、この「土粒子」の執筆依頼が届いたとき、学会賞受賞者ではないし、それどころか本学会でほとんど研究成果を発表していない私のような日陰者に依頼が来るとは、土壤物理学会の会員数の減少もいよいよ深刻なものだとか、学会費納入以外で全く学会に貢献をしない私への、編集委員長からの叱咤であろうかなどと、ひねくれた思いを抱きつつ、お声の掛かるうちが花ということで、ありがたく執筆させていただきました。本稿では、私のこれまでの短い研究生活を振り返っての雑感を記させていただきたいと思う。中身の大部分は土壤物理学に直接的に関わる事柄ではない上に、私の浅はかさをさらすようで恥ずかしくはあるが、共感していただけることがあれば幸いである。

そもそも私が土壤物理の研究に携わることになったのは、学部で3年生か4年生のときだった。自分がやりたいテーマが、特にこれとってなかった私は、研究室ですでに取り組みされている研究テーマの中から、好きなものを選ぶことになった。私は確か「環境用水」に関するテーマに惹かれ、それを希望したが希望者が他にもあり、あえなくジャンケンで敗れてしかたなく土壤中の窒素動態に関するテーマで卒論に取り組むことになった。そのようにして意図せず足を踏み入れることになった土壤物理の世界ではあったが、修士課程を終えるころには、さらに研究を続けていきたいという気になり、幸運にも希望通り現在の職に就くことができた。茶園への窒素施肥に起因する環境負荷低減に取り組んでいる研究室に配属され、修士課程で学んできたことに関連したことができるのだろうと、勝手に思い込んでいた。しかし、研究室に入ってみると、土壤物理分野に詳しい研究者がいないどころか、学生時代に使っていたような土壤物理関連の実験器具はなく、pF試験はおろか、飽和透水係数を測定することも容易ではなかった。はじめに取り組むことになった研究課題も、土壤のpHや塩基含量のプロファイル分布の調査のための大量のサンプルの調整や、茶の収穫量や新芽の生育状況の調査など、目新しくないように思える地道なもので、自分が描いていたものとは異なるものだった。今振り返ってみると、そもそも修士課程を出ただけの人間が身につけている専門性なんてたかが知れていて、それをすぐに活かせるなんて甘い考えであるが、このときはそんなことを考えてもいなかった。そ

んな自分の境遇に比べて、同時期に就職した友人たちの研究環境が恵まれているように見え、学会等で会う度に彼らの研究が順調に進んでいる姿を見て、羨ましく思ったものである。また、はじめのうちは、研究者として一人前になりたいという思いばかりが強く、研究自身が目的であるかのように研究をしようとしていたような気がする。茶栽培の知識がまだ乏しい上に、農家の方にお会いして、土壤肥料分野の研究をしていると言うと、「あなたたちが肥料を減らせと言うせいで、肥料がやれん。お茶がまずくなった。」など厳しい言葉を受けるため、農家の方が集まる会合に出席するときは憂鬱だった。私の研究は、茶の生産者あるいは消費者に活用されてはじめて意味を持つにも関わらず、この「誰に」という部分を認識できていなかったため、研究のニーズを知る絶好の機会から、逆に逃げようとしていた。自分がいる環境に不満を持ち、自分の研究に意味を持たせてくれる方々の言葉に耳を閉ざしている、そのような状況では、研究が順調に進むわけがない。そして、そのうまくいかない原因を、また自分の研究環境のせいにしてしまう。

このような誤った思考から転換できたのはいつの頃からだろうか。はっきりとはわからないが、そのことに気付くきっかけとなったのは、「廣野さんの研究は現場に密着した研究所にいるから取り組める問題を扱っている。野菜茶研に入って良かったね。」とある研究者の方から言葉をかけていただいたことだ。自分が就職当初に抱いた思いとは全く逆のこの言葉を聞いて、ふと考えると、そのとき取り組んでいたことは、学生時代にやりたいなと思っていたことであつたし、実験室レベルから、茶園レベル、あるいはさらに広い地域レベルでの物質動態に関する、学生のときには想定できなかったような総合的な研究が行える恵まれた環境にいることに気付いた。このような様々な研究を行えるようになったのは、これまでの仕事を通じて人のつながりが徐々に広がってきたためであろうし、入りたての頃に取り組んだ地道な調査が、茶栽培の現状を理解する近道だったのではないかという気がする。そう思うと、ある有名なスピーチの中の「connecting the dots」という言葉が浮かぶ。それは、Apple社の設立者であるSteve Jobs氏がStanford大学の卒業式において行ったときのものだ。このスピーチについては、オリジナルの原稿や動画がWeb上にあるので、正確なところは是非それらを見ていただきたいが、そのスピーチの意味するところは、「現在から、将来に向かって点をつないで線にすることはいできない。今になって、過去を振り返ってみると確かに点がつながっ

<sup>1</sup> 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所  
2009年10月16日受稿 2009年10月18日受理  
土壤の物理性 113号, xx-xx (2009)

ているのがわかる。今できることは、点がつながると信じて行動すること。」といったところだろうか。何もジャンケンで負けたことが今につながっているとは言わないが、自分がやりたいと思っていたことではなく、自分が置かれた立場でやらなくてはならなかったことが現在役に立っているかもしれない。「将来、役に立つか立たないか」を今、判断をつけることなど私にはできないのだ。あまり気が乗らないことや、そのときは何になるのか分からないことでも、将来何らかの形で自分の糧となると信じていることができるのならば、取り組んでいきたい。少

なくとも、そう思えることでその仕事や作業が苦にはならないだろう。また、現在の仕事は、農家の方と接する機会があることも、大変ありがたいことだ。農家の方から聞く話は、時に厳しい言葉であるが、本当に必要としていることを教えてくれる。まさに、本誌第 104 号の「土粒子」の中で加藤氏が、ニールセン教授の教えとしてご紹介されている、「農家は事実をよく知っている。」という言葉のとおり、現場の事実を知っている農家の方の知識と経験から学びつつ、その要求に対して、自分はどうのような貢献ができるのか模索していきたい。